



中村俊定文庫
文庫 18
115
1



晉其角序



那潜乃集つる事古今り
たりは道におよび起通
き時たれや切術の事一也
しそるれ白り魂を入る道
とゆえに極めざるに似る
西久く世よまらり
ましくよらて不変の事

を志しし五徳ハツルノ及ん
ゆんをこゝゆ通さぬ一な
こたり彼あり上人の骨り
てんを作しししし詳い地
ゆる笛を吹やうになん結る
とりさ神なる人よ成て清き
物をも五の輝のまらけさ家は
及魂乃法代をあらうりよ結ふ

屋あきしたありあけ入る
しパイウエツルくひくまき
いづれん吟輝をあめ魚
し只能階も魂代入し神
よころし我翁行脚乃るあ
字加哉しちり山中のく
猿し小養を看せし能階
乃神をへぬしん今神をた

らまゝに新賜のむすしを呼
ひも神あゝに懼る人まじ幻
術たりこれをもえうしこれ
集をつらうしこれのしる名
付しはまきあはる是う序を
代らうし魂を合せし去来
へん兆乃はしあはるしよまうせし

手書



猿蓑集卷之一

冬



初〜猿蓑を小蓑をほけ也 芭蕉
あまきけを時多きと夜時多し 其角
時多きやまゝのしるし 千那
幾人〜猿蓑のむすし 僧 文州
鏡持のむすし 膳所 正秀
屋原やしらむすし 史邦

表上

舟人よめはまきしきりし 可成り 尚白

伊賀の境より

やあや素良の隣乃一時雨 曾良

町ありや早木つじ屋の窓あり 元北

了りて竹田の里や坊しりて 乙羽

多すまはれ早木の里や小夜町 羽紅

新田は稗穀地 昌房

いりや沖の町ありま帆片 去来

とらねよけや北平代早のあ 伊賀 百歳

一ふりの動く地をまき 野水

伊賀より

しりしにねとわしりし船の岸 其角

歸りのねはよもえん 同

禅もて去のるるや 元北

言香るのわきりし松よ十月 嵐蘭

いりしや頬腫痛む人の影 芭蕉

かよけを延びたころの冬をよむ
凡兆

ふゆよし

揮舞のこまあり外も枯れ
伊賀 大正方

流帰をたもめて過す十絶句
膳所 裾道

ちよのふれやけうくあふ呉姫女
伊賀 越人

まのしほは茶あふゆよれきり
伊賀 猿鉦

友ちの賀子も垂しをよむ
凡兆

公羽の望田は家持をよむ

雑水のおもろけい冬こもり
其角

ふ乃きと牡丹のふれん裸
伊賀 車来

草津

あひをるちうんくのこり
尚白

神道水にまらうるは鈴
琢碩

霜月朔旦

掃さらりふよ物あり赤栢
伊賀 良岳

水き月れあを禊よ水仙ふ
羽後田 不王

今ハ世をふらめじやもや冬の蜂

尾張 且葉

尾野のころもあま海風即

伊賀 去来

一徳くさじき海や釣干菜

探丸

ころころに又賀れ音井の音

口戸 尚白

茶湯くつらひも目も梅の夜

龜翁

炭竈より子負れ枝の倒きり

九兆

信つめ娘のころや赤火燧

芭蕉

寝ころや火燧蒲團のまわぬ

其角

山前小室歌もあうぬ冬を重

尾張 九兆

其鬼や地まひ切も登れ西

伊賀 菘境

ころころ眠もやむをさうれり

伊賀 半残

貧交

まーいりそ孩子れ切を譲りる

丈州

浦風や巴をころすむ衡

曾良

あゝ儀やころと列も友衡

去来

猿のめと踏浦や濱千鳥

史邦

表

背門口乃入江よのほろふちをれ 丈艸
いし道々雪よまききして鳴千鳥 千那
矢田のおちや浦のあらは鳴あを 允兆
筏たれたんへる跡や鷺のち 本節
水底をうらんで其魚の小鴨舟 丈艸
そらんも寝入るわら余吾の海 路道
死んで操成らん鷹はふか 貝葉
襟をとり首引入る冬月 松風

天木戸や鎖のきれて冬月 其角
かゝるに蒲團もりや六の環 長崎 暮年
又やまゝん旅人ふし 石部山 大津尼 智月
翁は御北のまゝ衣をとり 義濃
らる託あり略く 竹戸
昔やしていつあつんしやけ衣

題竹戸之衣

玉とめ我のまけあゝ紙衣 曾良
魚のけ袴乃やとせがと水衣 探丸

志のついでに教珠も此の字に網袋 史邦

色白砂に候す

膝つとよかすともうりたる霧の 史邦

桜樹の葉は数に狂ふありけり 野童

鶺鴒乃鴉うりこほりし飛散るれ 伊賀 示蜂

呼ふも舞賣つんとぬあられけり 凡兆

をうれ津うさりや朝飯の世あはれ 膳所 晝好

しつちや内は居たりれ人へ得 其角

初雪よ鷹部屋のうら新朗 史邦

新やびのふゆ吹くやきき 羽紅

つらもみん丸ね松のこりきき 探丸

下京やちつじよは夜たぬ 凡兆

たふくと川一助やちつじよの原 同

信濃路をさるる

ちちらとち積屋はたの川は 芭蕉

草之庵の留はあはれ

表老の公座もあけと巻れを
其角
尾張
羽立
長崎
卯七
許よも健あつハ
去来

青亜追悼

乳のそ子に世を海も師を
尚白
乙卯
節一記懐ハ
芭蕉

一月のそあも来りて
文州

住吉奉納

夜神のそや鼻息白一
其角
節季候よ又のそむき
任賀
須玖
あつちのそ
同
祐甫

乙卯、新宅として

くよ家そとくせと
芭蕉
弱法師のそ門ゆるせ餅のれ
其角

表上

歳の後や曾祖文をゆげふ手枕 長和
 うす望れしそはあやうくの者 去来
 らまては事始まらば伊勢の 同
 大とくやまはまきつるくるとん 羽紅
 やりくわく又やまじく人衆の唇 其角
 い孫とくふいしつ年れ暮 路通
 季のく我破き袴は幾くあり 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面をすやにほまは 其角
 るふすこ思ひこり燕や時鳥 其角
 邪を横よこしにけりしす 芭蕉
 時きりしよもあはれし遊ばし 尚白
 けりしは行もなまぬ門梅 凡兆
 しつ途もさのこしす時鳥 智月

蜀魂たうくや木の多能角樽 史邦

入おれしきみの中やにきぬ 羽紅

ほくろの涙ふりかたあつらひ 文州

んちうの代官屋やほくろまき 去来

こし飛去我塚しあけちとよみ 遊女 奥刃

松崎一見の船中ききしや
主病の毛衣とさうりたれ

素鴻やおぼよ身をたれほくろ 曾良

うもいぬまはしかりせよかんと 芭蕉

旅館庭にやうく
と色草をとんす

身相系うろよ海をいちり 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あはれうろくくろくろりか 其角

系うくれぬ花を牡丹代安 江戸 全峯

別僧

しるさきよめ心やとよきよ来囊花 越人

ちとよめもさくよとんちのめ 珠碩

箱は伝らたててすまふ
しりて

似合亡人しよけいのつちもほの里 杜國

あふさきもけいけいのおま 嵐蘭

井すゑしゆく清杜のり 半残

起おきくぬぬのの乃

起おきくぬぬのの乃乃 仙化

題去来之岨峨洛柿舎有

厚こ極くのの木き魚う屋やををのの処ぢか 凡た兆

破やちちのの麻あ子こががいい道 曾良

南都旅店

誰たののくくりりのの乃乃国こ代だい桐 千那

洗あ濯ら也やももああよよとととと区く傳でんのの末ま 尾張 薄芝

豊國よて

竹たけの子これれカカをを経へるる多たととよよへへき 凡た兆

多たけけのの子こやや白しろ濁じやくのの一いち懸けんをを 去来

たけたけののここやや推おすすめめのの強つよむむのの心こころ 色蕉

猪ノ吹入とさうらそり 正秀

明石夜泊

晴まやしるれとすぢま月 芭蕉
君の試や徳庵茶を鍋一ツ 越人

五月三日

しるまうーにさうそ

るのま月と並くわけ高蒲か 其角

粽はふかこふこまむ額髪 芭蕉

隈の廣きうーの餅粽 岩翁

こひに客人やとふまうりや 尚白

五月六日大坂より死の
遠忌を吊りし

大坂や月ぬれ夏乃み十夜 蝉吟

真茹の館にて

其草や兵九つゆらん跡 芭蕉

這出よわい屋下式蟻の跡 同

は境いひしるまうりし
こりも一書

かつらり角ありしけは決定的石 同

五月ぬよ家あり控てあちり

元兆

し祿妻の味なきやわりの

末節

るとの謂はれありさつと雨

史邦

奥羽名取の郡よ入と申ゆまの
の塚ハつらつとやとるゆま

道より一里さくらりたり乃方

笠落しつらまよるとまゆ

わりつらまよるとまゆ

ちりつらまよるとまゆ

笠落やいつとみ月たぬり道

芭蕉

大和紀伊のさういそあ一
て作東の形れをさういそあ

すめらみは粉はつとま
紙のつらまよるとまゆ

つらりのつらあ一故やみ

去来

髪利や一夜よ今情みり

元兆

日の道や葵飾くと月あ

芭蕉

待地やつらまよるとまゆ

羽紅

七十余の老醫ふまらりゆら
すまらりゆら
にいふのむをけらるるを醫
いふらりゆら
る人よあ
ゆらりゆら
ゆらりゆら

けし年よころといふところ
ゆきさうりらむし

六尺も力おとくや五月あえ 其角

百姓も妻よ取つく茶摘可 去来

ま〜とや茶山よはまぬつれ 正秀

つみ含子もけけや妻白鳥 游力

孫と愛し〜

妻よ余の家〜やらん雨蛙 智月

まよふ具て體道喰よ山や歌部 花紅

あ〜川の園〜

月流の〜りや奥け田抽〜 道進

出羽の〜と〜

眉掃をと面新〜して花影のふ 同

法隆寺南帳
南無佛のた子を拜す

浜袴の〜く〜花粉のふ 千那

田の臥た豆つ〜むけ 伊賀 一万宇

膳所曲水之樓〜

螢火也吹とらほきそし塘のやと 去来

野田乃螢乃二句

闇の夜や子を泣かすと螢の 凡兆

いしつらんや船頭酔て其の 芭蕉

之熱野へ清もつ時

螢火やうらみ入るは鬼尾谷 田上尼

あけらるる粉とさあぬ 尚白

草むしや百合の中これの魚 半残

病後

赤くやのらるる 百合のふ 何処

すくや家よりけし 百合の花 乙卯

蟻蚊癖を作ると

子やらん其子の母を蚊の吟 嵐蘭

餞別

五とすや蚊屋もろくぬ 香 里東

余宮下は看とれし

介一、夜と古河の冠者よ名所哉 其角

障風や空のまき以耳乃乃穴 丈艸

下野や地味なううの蟬の歌 嵐雪

客よりや花をよけゆる船の歌 膳所探志

ゆく死ぬううまうんまう野の歌 芭蕉

表とや音麻州とあめのは 槐市

流りぬく澤の花のうく流哉 元祐

舟引の書け唱奇の合歡の花 千那

白雨や鐘すううも日た夕 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一枚の拾らうま 嵐蘭

日焼田や時くうう鳴く蛙 乙幼

日乃暑と盪の底の蟻うれ 元祐

水を月も鼻つとあうう殺き屋 因

目の曇やころけうう暑と牛け台 正秀

うう暑く籠うう髪の扇 本節

志りんゝの鞍ゆへにうまうし
野童

夕のうららけしゝ
羽紅

青草の湯入おんあけり
巴山

千子のあけり

さしつゝの國うり

マをくめ小袖を今や着用千
芭蕉

水を月也朝やうらぬ夕もみ
嵐蘭

志りんゝの鞍ゆへにうまうし
宗尺

下は平教平いづる何いぬ
元形

辰より雲つゝ思ひのまゝ
千那

月錦や思乃影純唐紙
曾良

夕のうらや岬並しゝ
去来

つゝのうら

石のこゝ今のま比敷
大坂
之道

猿蓑集卷之三

妹

穉子や蓮花しるしは花一

此句東氏よりききし

不知
讀人

まゝ素堂

かひくちのめけり歯也秋の風 秋風

芭蕉居し何よかれや妹の風 路通

人よ似て穉もまゝに廻りて 珠碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯れきくやまの山 曾良
 芦原や野鳥の寝ぬおを輝の風 山川
 あまのやみや鬱合を留け枯れぬ 凡北
 しの露や精の所芝の起ぬる 去来
 大比叡やこゝろ好む草のすめしき 野童
 と雲らりて露とぬれぬや桐の露 凡北
 文目や六りもたぬの夜よ似す 芭蕉

合歡のふれをさうふと云ふけ 同

七夕やあまのりいふくはるぬへし 杜若

こやこよの位しうとらり相撲取 去来

朝のほろろ寝るあはらけりし 風姿

舞やあまのこゝろ受れけりし 及肩

笑のも泣きもよと流木槿のし 嵐蘭

まぢ無くけりてるし木槿の 秋風

ふたれ流しぬれりし木槿の 千那

藤

秋

よきものゆくぬめあききや殊巖雨 史邦

そよよや藪の叶より卯あし 豊稔

秋風やいづのこぼるうららき 子尹

迷い子の親めころやすき 羽紅

まよき 楊乃先け 凡兆

君とよのまゝの 去来

草刈 李由

え禄二年論は伏せしきて
こらのくらくら三越後よかり
り料一々まかの國よて
いさかりゆりていせまてえ
とららるる

いつくよたよれ跡も秋の更 曾良

桐のまにうららぬの 芭蕉

百舌鳥あくや入日さ 凡兆

初序よけ 後悟

表上
下

望田よ

病屋代後さびよあて路の 芭蕉

海老の巻を小海老よあて路の 同

加賀の小屋にこまや夕田乃
神社の空物とてててて
うらやううらやう乃よよててて
錦のさしをさささささ
うらやうのわらわらわらわら

心もよし甲のりけきりくす 芭蕉

葉白や二葉お中のお花が 尚白

うらやうやうらやうよ 風姿

うらやうやうらやう

葉月や夕陽よほろ人ともん 千子

この月に菴のあつて成るけり 之道

粟稗も同お成るけり 半残

月もせん休見の柳乃 去来

翁を茅舎よあて

伊賀

おもしろく松笠もんよ 土井方

藤

中

加茂よ詣志ては涙ののち

あまのこのやうにうたせぬよ
なつこころをうらや

月歌や拍車もろく藤のこ 史邦

友連の六條よかきうらひつ
こころをうらや

影やうたせをえはる朝日夜 卓袋

いそはるやあやしーい月の歌 乙羽

京筑紫をすれ得る信守 文州

明の相もやふよ月一 元也

ぬりひこころをあらぬ月の歌 尚白

向の籠もやの月をる茶の 昌良

え祿二年つらうは遠り
月をるくは氣比の明神よ
信守ちとくの右例

月清く照りのとく 瓜乃と 芭蕉

仲雄の望猶子を遠き寄

うら夜の月もふらうらおと遠 云来

明月ややゆるき茶はあら 昌房

表上

月又まゝく人の破よゝう
 僧正のいよよのふ屋れをあら
 印潮や鳴つのはの飛舟
 一戸や衣もやうこましく
 稗の種はる遊一しん
 流糟やかゝるの喰ふ荒島
 りやまうりてきう地ゆる鎌か
 正秀
 越人
 去来
 凡兆
 尚白
 羽紀

一鳥不鳴山更幽

物の音いりたりは葉山
 一しんき拍ふもんすり
 旅枕庵のつとを軒下
 鳩うや流禱ふの蕎麦島
 とけや下くさや縁の火
 鱗釣はもるしし籠つり
 わあ向のすゆりさう
 葉を切る跡まうり
 元兆
 曾良
 千里
 珍碩
 凡兆
 半残
 尚白
 兵角

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怒乃悔もあり

露沾

上臈の山莊より

候しそりて

梅もや山路隔入るな

去来

しん香や入異半の角

句空

庭真

梅の香も利し流す谷真
上号

くつ蝶を由りてまよふ梅のふ 半残
梅の香や酒のつらみあはれ 蟬
しるしのあやけ一筋を露のたう 其角

子良銀のほよ梅もよとて

伊子良子れ一とと梅のふ 色焦
瘦女較や作りたつ我の軒の梅 千那
灰捨て白梅くまじ垣縁 元兆
日書くは梅吹くわ骨半房 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅よりり色しりき 風妻

武江よやとむく環亭の 錢草

寝ころも窓の袖目や園の梅 乙羽

幸末のくく梅生のかくく
つらきくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくく
窓窓のくくくくくくくく
あつちとくくくくくくく
まきれやににににににに
くくくく威動くくくくく
くくくくくくくくくくく

藤江

庄

よふしつては寝てけりし
夢をいひて又一句の月ほけり

夢をいひて又一句の月ほけり 嵐蘭

百八のひてはさくらや園のしめ 其角

ひらり寝の能宿らしくおき日 去来

野田や厚遊のひく摘る来 史邦

くつふやちよ満まるる来 嵐蘭

正月月あよあけりなめとく 如行

憶翁之客中

裾れく草をまつと志ん草枕 嵐雪

つとすく踏身かきもあや 路通

七種や跡ようく朝くらす 其角

家やかし雛のよけ根芥 丈艸

うすしりやわらうは笑る 其角

豚ふきぬらるるに月あられ 同

鈴しきこぬらるるは 去来

鶯のち踏るるす 伊賀 一桐

表

三

雪やしほ一みりたきりりり
江戸 溪石

うらりやを詠めり礼之し
其角

鶯や下駄の齒よつく小田代止
伊賀 九兆

雪や窓よ久ち色すんあ
伊賀 魚日

やめの雪折らりりりりり
探丸

けしきさよめ持へき柳りれ
江戸 ト宅

垣うにうへてくれり柳り
同 遠水

よこし 極変れや柳りれ
尚白

青柳の志もれや鯉の位所
伊賀 一啖

雪やけや鈴いりりりりり
同 未白

待中乃正月もいりりり月
揚水

回や歌よつらして

雪やけにやけりりりりり
芭蕉

うらりやまうりりりりりり
越人

うらりなよりりりりりりり
去来

飛路沾公より餘寒の當座

春

花

里人の情落ししも田畑のれ 嵐推

蝶のまじりては夜寝よかり有窓のほろ 半残

糸を鳥切て白根、嶽との赤花 挑妖

いのちのちりこころもすしや潦 園風

目の影やこもくれよの親すめ 珠碩

二の鬘ぬむきあのすめや縁のえ 土芳

園の池や果なまもころとあゝ衡 芭蕉

越より飛澤へ好くし縁の
こころのあやまらぬまじりて道

あまのこころ
とまじりて

鶴の巢の樟の枯枝よ目みぬ 允兆

ふすまのうらみえんを中めし 石口

子や侍ん餘りそくたのさあや 秋風

いしりあく中れ拍子や雉まのや 芭蕉

芭蕉菴のふらふら

重草小鋸はしあしやこれ 曲水

木尻筋旅しつゝくつあめ 山石

畫讚

山吹や空後の椿炬燵白く時 芭蕉

白玉の雪あまきつづく椿の枝 車来

十のころりしつらやうしうら
あつたれの髪けつらんもあ
らうしとてあま

竹のうらを昔やちらり椿 羽紅

鴨半おふくさつらんも 坂上氏

うららよの笠やうらうらも 芭蕉

うららうらうら 伊賀 利雪

東叡山よあうぬ

小坊よや雪よあうら 其角

一枝のゆめも 尚白

雛のおいも 凡兆

ま先よらん 支州

馬羽のうら 史邦

あな斎よ 千那

葛城のゆきをまじりて

花つらやまよのゆきけり花の顔へ色遣

いつの國を垣のたはりのつら
あはれ乃ハ空橋の柳よ酔
らまじりてと云傳へんらんを
花し

一軍ハこれ花雪のふゆ下 同

云々の墓東武谷中にも
と歳としておれ九年の月
浅くともぬ墓のあはれ極
ゆるりやゆき女おゆり
つらやまよのゆきけり
他の墓程と云傳へんらんを

まうやぶらぬよ野の往還 園風

知人よあはれと云ありんか 去来

あはれ僧の嬉り一あはれおれ 凡北

浪人のやうに

篇をよみの夜あはれう花観 半残

野きこしれあはれ中絶ゆへ外 長眉

これ奥の奥
この奥の奥

大寺やうに奥乃あはれ 曾良

道灌山よのけしき

る清やまゝのびをひらけ嵐蘭

源氏の強きこと

探子に夜らるまれまじりて 羽紅

庚午の歳家をと焼く

加品

後よりけしきをひらけりて 北枝

しれりや加藍の櫃やけり 凡兆

江戸

海棠のけしきを満ら夜の間 普船

大和のけしき

草臥くちりてはたぬのま 芭蕉

山や躑躅ふけけ尾のひら 探丸

やうくはまのけしきを 智月

兔角しておまつるし 山川

伊賀

望鳥のけしきをひらけ 式之

木曾塚

具よの石のけしきをひらけ 乙羽

春風夜去の如く初陽の堂に就く 曾良

望湖水惜春

好春去をよめる人の心はさきさきの 芭蕉



